

よぬだ とろどころ



第四十九号

ヨナダーが下米田・牧野の色々な見どころを紹介するよ

西脇片山家に残された甲冑

上記写真は、文化の森で撮影したものである。甲冑そのものは、現在文化の森で保存されている。

下米田の西脇の片山家には、この甲冑が保存されていた。文化の森の調査による見解は以下のようなものである。

① 腹巻と称されるものに属する甲冑
当世具足の可能性もあるが、「家紋」「簡素な構造」から、御貸具足として考えるのが適当である

注 腹巻とは、下級武士や下級兵士が使用した軽武装用の防具で、鎌倉期にみられる腹当が進化した物だとされる

② 甲冑の前面に「家紋」が記されているが、これは「梅鉢」と呼ばれ、文化の森の見解によれば、齋藤道三に代表される齋藤家が天満信仰に厚く、それにちなむ「梅」をモチーフにした梅鉢紋を使用していることなどを指摘している。

注 上記の見解によれば、この具足は齋藤家が動員する兵に対して貸し与えたものではないかということになる

③ 甲冑の様式から、片山家が所蔵する腹巻は、中世以降主流になり、室町期以降戦国期に使用されたものと推定する

注 齋藤家は戦国期に美濃を下克上で統一したことが知られていることから、このあたりが起源ではないかと推定している



西脇の片山家は、江戸前期からその動静が記録に残る家である。右の航空写真は美濃加茂市の地理情報システムからの航空写真で、中央の赤いマークがある部分が甲冑が保存されていた片山家で、その南に天神神社がある。江戸期は神仏習合信仰が広くみられ、片山家も片山安養寺と天神社等を管轄し修験道を含めて広い地域に影響を与えていた。しかし、明治維新で神仏分離がおこなわれ、神社仏閣関係の所有物も分散した。この中で、片山家の土蔵に収蔵されていた甲冑は注目すべきものであり、今後なぜこの甲冑が、片山家に残されていたかを調査・研究する必要がある。